

#### Ⅳ おわりに

小学校、中学校及び高等学校の学習指導要領は、昭和62年12月の教育課程審議会の答申を受け、心豊かな人間形成、基礎・基本の重視と個性教育の推進、自己教育力の育成、文化と伝統の尊重と国際理解の推進の四つの基本方針に基づき改訂された。

この改訂で、社会科でも大きな改善がなされた。小学校では、生活科が誕生し、社会科は、第3学年以上の教科となり、高等学校では社会科が再編成され、地理・歴史科と公民科の2教科が設けられることとなった。

本研究では、新教育課程が目指す教育の実現に向けて、「児童生徒自らの生き方に迫る社会科指導の在り方」の主題を掲げ、まず、県内の中学校社会科担当教員及び生徒の意識・実態調査を実施し、指導上の諸問題を探った。そして、授業研究の視点を定め、小学校、中学校及び高等学校における授業実践を通して、主題に迫った。

小学校の授業研究においては、紙すきや機織りなど一人一人の興味・関心に応じて、多様な体験の場を設定し、活動を通して、働く人の苦労や努力などを実感的につかみ、人々の生き方に迫ることができた。そして、その体験をもとにしながら、学習問題を明確につかみ、追究活動に取り組んでいった。体験的な学習活動を重視した学習展開により、子供たちは社会的事象を自らの問題としてとらえ、追究意欲が高まったのである。新しい社会科の学習指導では、観察、調査、表現などの具体的活動や体験の充実を図ることが重視されている。今後は、表現力を育てる手だてや評価の在り方が課題である。

中学校の授業研究においては、生徒一人一人が、自分なりの旅行計画書作成という目的意識をもって学習問題づくりを行った。生徒たちは主体的な追究活動を行い、自ら学び、考えるという視点で、自分の生き方に迫ることができた。中学校の授業は、どうしても教師主導での講義型の一斉授業で、知識・理解が中心になりがちであるとの指摘がなされている。そこで、新しい学力観に立ち、自ら進んで考え、判断し、自信をもって表現したり行動したりできる、創造的な資質や能力を育成を目指し、適切な課題を設けて行う学習の展開を考え実践した。その結果、適切な課題を設けた学習は、学ぼうとする力を育てるのに有効であることが明らかになった。時間数の問題、生徒の調べたいことと内容とのずれなどの問題などは残された課題である。

高等学校の授業研究においては、地理・歴史科で、知識をただ記憶するのではなく、歴史的事象における人間の活動に目を向ける授業の実践を試みた。高等学校においても、実物の模型やビデオ教材などを工夫することによって、生徒は関心をもち、意欲的に学習に取り組むことが分かった。公民科では、ディベートを通して、自ら学ぶ意欲を育てる学習指導の在り方の授業の実践を行った。生徒が生き生きと発表したり、資料を収集したりするなど意欲的に取り組む姿が見られた。

このように、共通の研究主題のもとに、小学校、中学校及び高等学校で研究を進めてきたことは、新しい教育の在り方を求める上で大変重要なことと考える。今後も一層研究を深めていきたいと思う。